

シラタマノキ, ミネズワウ, ベニサラサドウダン, ヒメツルコケモモ, ツガザクラ, シヤクナゲ, ウスキシヤクナゲ, コメツツジ, コツマトリサウ, ヤナギトラノヲ, オホサクラサウ, イハイチヤウ, タウヤクリンダウ, エゾリンダウ, ホロムイリジダウ (武田博士), ミツガシハ, エゾムラサキ (野化), ホソバコゴメグサ, ヨツバシホガマ, オニシホガマ, ユキワリシホガマ, オニク, コタヌキモ, オホアカネ, ミヤマシグレ, ヒメシヤジン, チヤウジギク, ウサギギク, サハオホノアザミ, ミヤマカウヅリナ, ミヅギク, ヲタカラカウ, マルバダケブキ, シラネアザミ

文献 早田文藏: 南会津竜其ノ附近ノ植物 植雑 17; 8—9 (1903) 同 A list of Plants collected in Aizu. 『会津植物目録』 1. c. 27—36 (1903) 武田久吉: 尾瀬紀行 山岳 1—1; 119—138 (1906) 同: 尾瀬再探記 1. c. 19; 1—25 (1925) 館脇操: 尾瀬をめぐりて 山岳 19; 25—80 (1925) 飯柴永吉: 尾瀬方面植物目録 フロラ No. 17; 1—6 (1929) 星大吉: 福島縣南会津郡植物目録 斎藤報恩会博物館時報特輯号 4; 1—24 (1933) 文部省: 「尾瀬天然紀念物調査報告」 (1933) 奥山春季: 尾瀬地方產すけ属植物 植研 11; 662—663 (1935) 同: 尾瀬至佛山探集植物目録 自然科博 7—7; 12—16 (1935) 館脇操: 尾瀬地方の植物「尾瀬と日光」 117—123 (1941) 三宅徹: 尾瀬ヶ原探集記 日大中学校友会誌 26; 31—44 (1941)

## ○キバナバラモンジンを語る (久内清孝) — K. HISAUCHI, Japanese name of *Scorzonera hispanica*.

終戦後各処に出入自在な地域が出来、出入が合法的かどうかは別として、兎に角色々なところが見通しがきく様になつた。そのため、キバナバラモンジンがちよいちよい眼にふれる。しかしこの草が戦後に來たものとも思われず、前からぼつぼつあつたもので、東大構内などでも、かなり古くから知られていた。田中徳氏の「天皇と生物研究」などにも皇居内吹上に沢山生えていることが記されている。ところで、この学名がなんであるかということになると、一寸面喰わざるを得ない。東大にある、故松村博士の手記があり、当時植物園で栽培されていたものを圧して作つた標本 (1878) によれば、まぎれもなく、名実共に正しい *Scorzonera hispanica* L. であつて、和名はキバナノバラモンジンとなつて居る。そして植物名彙第1版 (1886) では、ギバナバラモンジンとなり、ノの字が畳され、福羽逸人氏の蔬菜栽培法 (1893) にはキクゴボウとあり、植物鑑覧第1版 (1925) ではイスパンバラモンジンなる新称が與えられ、キバナバラモンジンの名は *Tragopogon pratensis* L. に移され、植物園種子目録 (1940) なども、同様になつてゐる。そこで、現在帰化しているものはなんであるかといふと、明かに *T. pratensis* L. であり、現在では、これがキバナバラモンジンと呼ばれている。しかし私が廻行し得る最古のもので、この名で呼ばれたものが、上記の通り、東大標本だとすれば、キバナノバラモンジンは *S. hispanica* でありこれを図説したものは、たゞえ、その図が、外國書

からの借物だとしても、斎田功太郎、佐藤礼介両氏の「内外植物誌」であつて、他書は *T. pratensis* L. をこの名で圖録している。行さつは絞上の通りであるから、*S. hispanica* L.=キバナノバラモンジン=キバナバラモンジン=キクゴボウ=イスパンバラモンジンで *Tragopogon pratensis* L. には更に証明のない限り、和名がないことになる。しかし適當な和名を撰ぶことは、なかなか困難であるから、バラモンギク位のところで、お茶をにごしたらどんなものか、恐るながら提唱する。それから *S. hispanica* がどこか國內に残存することがわかれればもつけの幸である。同好の士宗教を啓むなけれ。

### ○キバナサバノヲの最初の採集とその分布（建部惠潤）

K. TATEBE : On *Isopyrum pterigionocaudatum*.

キバナサバノヲ *Isopyrum pterigionocaudatum* Koidz. in Acta Phytotax. Geobot. 9: 72(1940) は但馬國朝來郡山口村田路産品を type として命名記載されたものであるが、本種の発見から発表に至る間の事情及び筆者の観察を「新種キバナサバノヲに関する雑報」として兵庫縣博物學會々誌第 20 号(1944)に但馬の自生地発見者川中菊市君と共に記しておいた。

即ち筆者は昭和 12 年 4 月 3 日播磨宍粟郡船越山でたゞ一花を着けた本種を得て、小泉教授に考定を乞うたが決定を後日にゆづられ、その後 14 年 8 月田代善太郎先生は同山の採集会に於てアヅマシロカネサウと考定された。ところが 15 年 4 月 23 日川中菊市君は上記の場所で完全なる標本を得て京大に送つたことから田代先生は自生地を調査され、その標本によつて小泉博士が研究の結果新種と決定された。

この時筆者へ船越山の花の標本を送るよう命ぜられ、生品を送つたからこれも参考にされたのである。

筆者は最近西播の植物研究家の故大土宇市氏の遺著を探査申図らずも氏が明治 37 年 5 月 21 日筆者の採集地船越山で採集していることを知つた。氏の苦心の著述「中國植物圖說」第 3 冊第 7 図に画かれたものは明かに本種で、果実をつけた全形と 1 小葉片の墨画とが図示され、その記載説明は次の通りである。

毛茛科 *Isopyrum dicarpon* Miq. サバノヲ (図鑑を見るに之に當る) サバノヲ ? 根部を要す(牧野氏考定) 35 年 5 月 21 日船越山に採集す。花去て果実あり、23 日行者山 全長 7 寸許 茎 3 角柱狀。根は黒く塊茎あり、茎葉は花梗下に対生す。葉片は 3 出、各小葉 1~4 分長の柄あり、披針狀橢圓形にして缺刻鋸歯あり、2,3 分~1 寸余長、1,2 分~5 分幅あり。3 小葉の中頂葉は單にして柄は長し。側葉は分裂して 2,3 の短柄区分をなす。花梗は 2,3 個茎長(註 頂か)に生じ苞を具す。実は 2 個水平に開張す。5 分 5 厘許り、種子は 6 個許あり、球狀にして平滑、カラシ粒よりやゝ少なり。

○接に矢田部氏日本植物篇 49 枚サバノヲは葉丸く之に似ず、次のシロガネサウの葉